特集　防災まちづくり(2)

□水清く　緑あふれ

人つどいにぎわう島原半島に

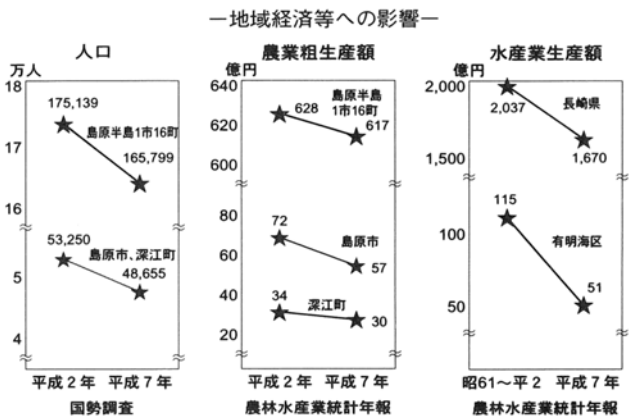
島原地域再生行動計画(愛称がまだす計画)策定
(1997～2001 年度までの 5 カ年計画)

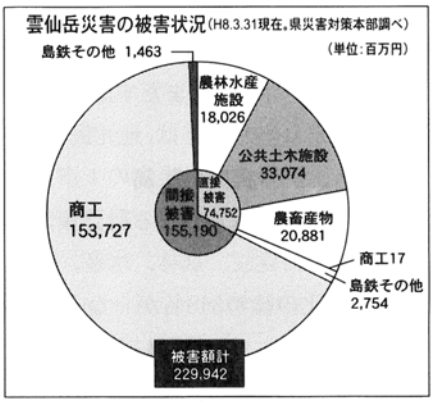
ガ	マ	ダ	ス
が	ま	だ	す
G	A	M	A	D	A	S

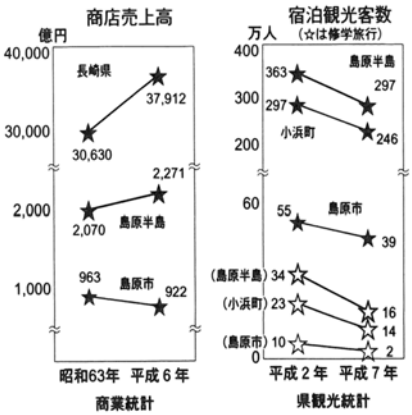
長崎県雲仙岳災害復興室
がまだす計画推進班

まず,これまでの雲仙・普賢岳の噴火災害に対する全国の皆万人様からいただきましたご支援,18 ご協力に対し,心より感謝するとともに,ここに改めてお礼を申し上げます。

長崎県では,平成 8 年度を「復興元年」と位置づけて,島原地域の本格的な復興と半島地域全体の振興に向け,民間と行政が一体となって,総合的かつ具体的な,島原地域再生行動計画(愛称がまだす計画)を策定しました。







1. 計画策定のねらい

雲仙・普賢岳は，平成 2 年 11 月 17 日，198 年ぶりに噴火活動を再開して以来，度重なる火砕流や土石流により死者・行方不明者 44 名，被災家屋 2,511 棟など，島原市，深江町を中心とする地域に大きな被害をもたらしました。この災害は，

①台風などの一過性の災害と異なり，被災地域が相次いで拡大し，我が国災害史上例のない異常な長期災害となったこと

②人口密集地区において初めて，警戒区域，避難勧告地域が設定され，居住はもちろん，営農や商店の営業など，全ての活動が中止を余儀なくされたこと

により，直接的な被害もさることながら，人口の流出や経済の停滞など，地域全体に深刻な疲弊をもたらしました。

この間，国などの配慮により 21 分野 100 項目もの広範囲にわたり行政及び新たに創設された雲仙岳災害対策基金などによってその災害対策が講じられてきたところですが，昨年，普賢岳の噴火活動が終息し，また，基金の 1,000 億円の増額と 5 年間の延長が実現したことを機に，地元で本格復興の気運が高まってまいりました。

この気運をとらえ，地域の方々と行政が一体となって，島原半島全体を視野に入れた地域の再生スケジュールとして策定，島原半島復興についての総意と決意を表明したのが「がまだす計画」です。

「がまだす」とは，地元島原地方の「がんばる」という意味の方言にちなんで，名付けられました。

この計画は，防災工事や農地の災害復旧，交通体系の整備などの基礎的な事業から，農林水産業や商工・観光業の振興，各種公共施設の整備などにいたるまでの幅広い事業を対象に事業主体，実施年度，財源負担などをでき得る限り明らかにしたものです。

もちろん，これまでにも島原市の「島原市復興計画」，深江町の「深江町復興計画」や県においても平成 5 年 12 月に「雲仙岳災害・島原半島復興振興計画」が策定されてきていますが，これらの計画は，まだ災害が継続中に策定されたということもあり，必ずしも具体性をもった計画とは言い難い面もありました。

がまだす計画は，国，県，市・町の事業はもちろん，民間の事業をも取り込んだ総合的かつ具体的な行動計画となっています。

2. 計画策定の進め方
～会議を全面公開～

地域住民の方々の計画づくりへの参加を促すために，計画に関心をもっていただくよういろいろな工夫をしました。

まず，文字どおり復興の旗じるしとして，計画づくりに住民や行政の英知と力を結集するためのシンボル「がまだす旗」を製作。

計画の策定に当たっては，地元民間代表，学識経験者，国の機関，半島の 1 市 16 町，県などの70人の委員からなる計画策定委員会と，その下に建設，農林，水産，商工観光，生活文化の総勢 348 名からなる 5 つの専門部会を設置し，30 数回に及ぶ会議を全て現地で開催，計画に盛り込むべき事業について具体的に検討していきましたが，その全て

の会議を全面的に公開としました。

しかも,その会議内容は,「がまだす報告」として,即座に半島内の全市町に公表,各市町の窓口で見ることができるように配慮しました。その「がまだす報告」は,発行回数は 41 回,総頁数は約 1,000 頁にも及んでいます。

また,住民の方々のアイデアを募集するために,「ガマダスファックス」を設置し,わずか 4 か月余りの間に,86 件もの提案をいただき,実現可能なものについては,計画の中に反映させています。

一方,計画への参加を住民の方に呼び掛けるために,テレビやラジオ,新聞広告,がまだすポスター,ステッカー,パンフレットなどにより効果的に広報を進めました。

3. がまだすの浸透

このような状況の中で,地元では,失われつつあった方言である「がまだす」を冠した言葉が盛んに使われ始めました。

例えば,新しく製造・販売されることとなった地ビールの名称が公募され,その結果「ガマダスビール」と名付けられました。

また,噴火活動が始まってから,まる 6 年にあたる昨年の 11 月を「がまだす月間」とネーミング,地元民間の若手たちによる島原半島全体をあげての祭り「がまだす祭り」が開催され,メインイベントが開かれた会場では,2 日間で 11 万人という半島初まって以来の人出で賑わいました。

こうして,地域住民の方々を巻き込んで,地域と一体となった計画づくりが進められましたが 9 会議の全面公開が好評だったのか,マスコミも,この計画づくりには好意的であり,いろいろな場面で数多くの記事を掲載,また報道していただくこととなり,地元の関心は否が応でも高まることとなりました。

この計画づくりは,計画策定委員長の言葉を借りれば,「島原半島の住民一人ひとりが主役であり,まさに半島あげての総力戦」であり,いろんな面で稀にみる手法で進められましたが,計画づくりのプロセスそのものが一つの地域振興策だと言えるのではないでしょうか。

4. 計画の内容
～27 大重点プロジェクト～

計画は,27 の重点プロジェクトと関連事業等からなっており,その主な内容を挙げると,

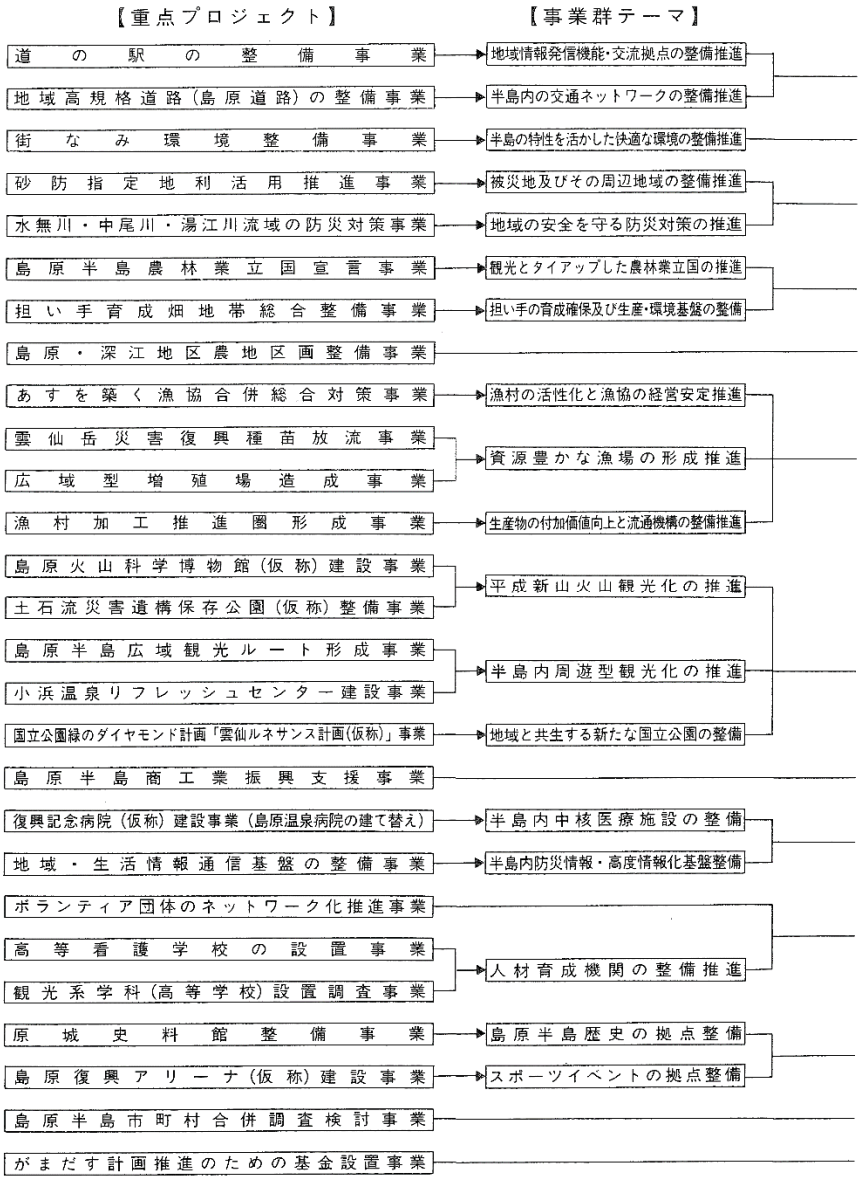
○半島地域の情報発信や交流拠点として,パーキングエリア,物販施設,レストラン施設を整備する「道の駅の整備事業」

○水無川流域一帯の火山観光フィールドミュージアム化を推進するための中核施設としての「島原火山科学博物館(仮称)建設事業」

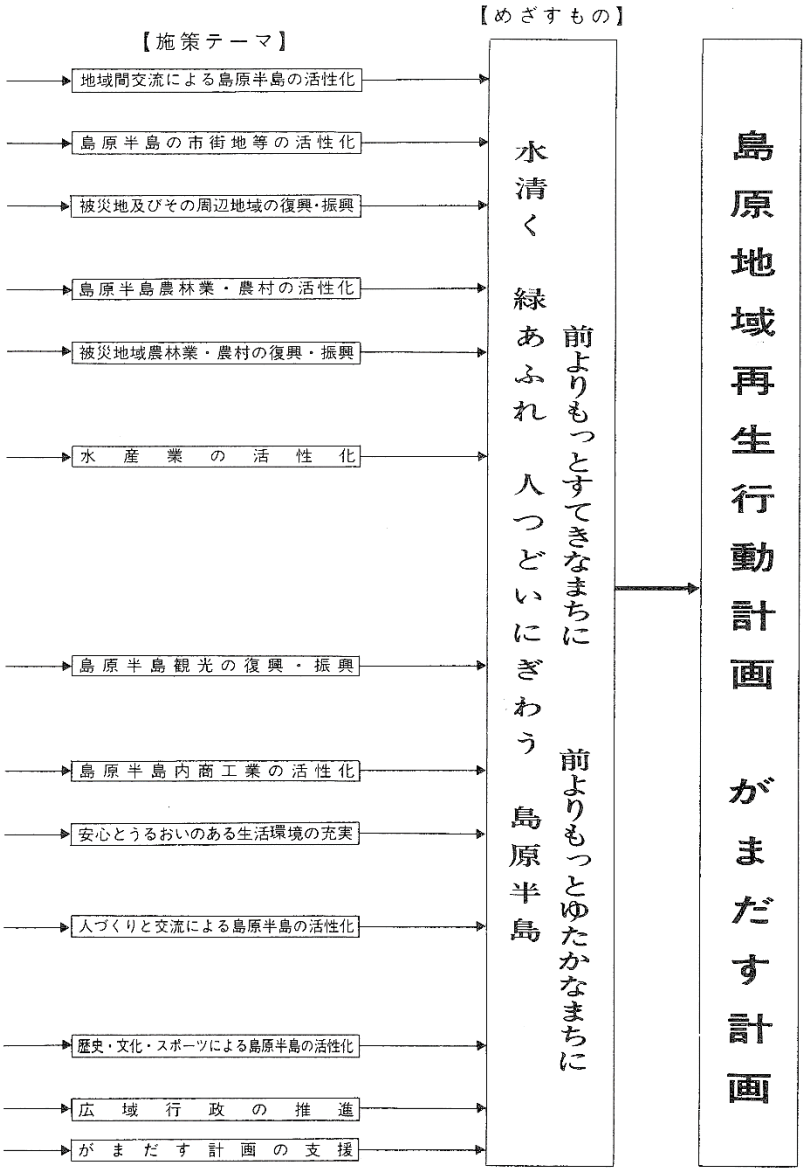
○災害のすさまじさとその教訓を後世に継承し,防災の重要性を内外に伝えるために,被災した家屋をありのままに保存する「土石流災害遺構保存公園(仮称)整備事業」

○国立公園雲仙の再生事業で,火山活動で傷ついた森林の再生,雲仙・島原半島の自

重点27大プロジェクトの事業体系図



然，文化を情報発信する施設整備などを盛り込んだ「国立公園緑のダイヤモンド計画雲仙ルネサンス計画（仮称）事業」などで，計画の実施期間は，平成9年度から13年度までの5か年間，当該期間内の総事業費は3千億円を超えるものです。



5. 見たくなる計画書

計画書そのものにも地域住民の方々に読んでもらえるような様々な工夫を凝らしています。

まず，計画書で，事業名から事業主体，事業年度，事業実施箇所，事業内容，事業費までを具体的に明記したのは，本県では初め

てです。

表紙には,島原市出身でご両親は今も島原でご健在の人気TVキャスター草野仁氏にボランティアで登場いただき,計画書の PR に一役買っていただきました。

巻頭には,災害発生時,小学校 1 年生だった子供たちが6年生になり,当時の思い出や将来の夢について書いた作文を掲載し,21 世紀を担う子供たちの計画であることを強調しています。

次に,委員長・知事対談を掲載し,「計画策定の趣旨や策定手法,計画推進の決意」を巻頭あいさつに替えて,読み物スタイルで紹介しています。

さらに,各章ごとに,策定委員をはじめ計画策定に関係した方々の「島原地域の再生・復興」に対するキーワードとなった言葉などを掲載しました。

また,計画の重点プロジェクトは,見開き 2 頁で 1 プロジェクトが分かるようにレイアウトを工夫し,かつ,完成予想図や写真などを用いて,事業のイメージがわかりやすくなるように心がけています。

6. 計画の実現に向けて

このがまだす計画は,実行計画であるわけですが,計画が絵にかいた餅にならないよう実現に向けて,計画の進行管理を行っていくことが大変重要になってきます。

本年 5 月 19 日には,民間と行政のメンバーで構成する「がまだす計画推進委員会」を発足,「水清く,緑あふれ,人つどいにぎわう」島原半島にしていくために,計画の今後の進行管理を行い,計画に計上された一つひとつの事業を着実に実行に移していくこととしています。

県としては,この計画の策定により,民間事業の投資意欲を呼び起こし,単に災害からの立ち直りということだけではなく,島原半島が,全国の過疎地域の振興モデルそのものだと評価されるよう,全力を挙げてこれに取り組んでいきたいと考えています。

最後に,全国の皆様方のこれまでのご支援に対し,改めて深く感謝申し上げます。